

2019(令和元)年のわが国周辺の漁海況の経緯と特徴について

2019年12月20日
一般社団法人 漁業情報サービスセンター

2019年のポイント

海況

- ・2017年8月に始まった黒潮大蛇行は、本年も年間を通じて継続。
- ・親潮は近年の北退傾向を維持。
- ・対馬暖流の勢力は本年1～6月にかけて強い。
- ・わが国周辺の海面水温は、親潮および混合水域や日本海中・南部をはじめとして、3～11月上旬にかけて、平年より概ね高めで経過。
※平年:(1981～2018年までの平均値)

マイワシ

- ・常磐～道東海域において、前年を上回る水揚げ。道東海域では、前年よりも痩せていた。
- ・東シナ海・日本海の漁況は極めて低調。

さば類

- ・年明けに太平洋中・南部で好漁。三陸・常磐まき網では、前年同様、例年より遅い11月22日から水揚げ量が増加。
- ・東シナ海・日本海の漁況は、夏以降低調。

マアジ

- ・東シナ海・日本海が水揚げの中心だが、夏以降前年を下回った。太平洋では三陸・常磐海域では前年を上回ったが、全体として前年を下回った。価格は前年の1.2倍。

サンマ

- ・棒受網による操業が本格化した1950年以降、最低の水揚げ量。8月～9月の主漁場は公海で漁場が遠く、小型船の多くが休漁。価格は前年の1.7倍。

カツオ・ビンナガ

- ・3月下旬～7月上旬に、黒潮大蛇行の内側の熊野灘およびその周辺の暖水域で、釣りによるカツオおよびビンナガ漁場が持続。
- ・三陸海域でのカツオの漁場形成は、前年よりも2ヶ月ほど遅れ、7月下旬に漁獲が本格化。
- ・アニサキスの寄生による影響が続き、気仙沼におけるカツオの平均価格は本年9月まで200円/kg台と安値。

スルメイカ

- ・水揚げ量は、生鮮が前年並みだが、冷凍は前年の25%。平均価格は、生鮮が前年の1.2倍、冷凍が前年の1.4倍。
- ・花咲港およびオホーツク海は好漁だが、他は全般的に前年を下回る。

2019(令和元)年のわが国周辺の漁海況の経緯と特徴について

2019年12月20日

一般社団法人 漁業情報サービスセンター

はじめに

2019年のわが国周辺の漁海況の経過と特徴について、漁業情報サービスセンターが、全国の漁業関係者並びに都道府県試験研究機関のご協力のもとに収集・解析した情報に基づき、気象庁や海上保安庁海洋情報部による海洋情報、水産研究・教育機構による主要資源の評価等も参照しつつ整理した。あわせて、主要魚種の市況についても整理した。

1. 海況

(1) 全般的状況(図1(a)～(d))

- ・2017年8月に始まった黒潮大蛇行は、本年も年間を通じて継続した。親潮は近年の北退傾向を維持した。対馬暖流の勢力は本年1～6月にかけて強かった。
- ・加えて、4～6月および8、9月の気温、日射量が高めであったことから、わが国周辺の海面水温は、親潮および混合水域や日本海中・南部をはじめとして、3～11月上旬にかけて、平年(1981～2018年までの平均値)より概ね高めで経過した。

(2) 黒潮およびわが国南方水域

- ・黒潮は周年にわたり四国～紀伊半島沖で大きく蛇行し、北緯30度付近まで南下、その後北上した後八丈島の北を通過していた。これにともない、四国～紀伊半島沖には、海面水温では必ずしも顕著ではないが、下層水温をみると明瞭な冷水域が周年形成された。一方、熊野灘～遠州灘には、8、9月を除き暖水域が形成された。特に6月中旬には北上した黒潮が遠州灘に著しく接近しており、7月にかけて顕著な暖水域が形成された。
- ・黒潮続流の流路は比較的安定しており、年間を通じて、著しい北上や明瞭な暖水塊の切離はみられなかった。
- ・九州～本州の南方水域では、海面水温は1～6月には平年に比べて概ね高めで経過したが、7、8月は平年並み～やや低めとなり、9月以降は再び高めとなった。

(3) 親潮および混合水域

- ・親潮は、1～7月には概ね分枝構造を示し、この間の沿岸よりの分枝の南限位置は、概ね北緯38～40度であった。8月以降は沿岸分枝が後退し、南限位置も東経148度以東で観測されるようになった。
- ・海面水温は、1～4月には北海道沿岸～三陸沿岸で平年よりも低め、その沖合域で高めであった。5～7月には沖合の暖水域が千島列島南部にまで拡大し、8～11月上旬にはほぼ全域で高

めとなった。11月中旬以降は、暖水域が急速に縮小し、平年よりも低めの海域が広がった。

(4) 東シナ海・日本海・オホーツク海

- ・東シナ海では、海面水温は、1～5月までは平年より高めで経過したが、6月以降は平年並みかやや低めとなり、9月以降は平年並みかやや高めで経過した。
- ・日本海では、1月から朝鮮半島東沖を中心に平年より高めで推移し、5月以降はほぼ全域で高めとなり、8月上旬までこの状態が続いた。8月中旬以降は、北部および山陰沿岸で平年比べて低めの海域が出現した。なお、前年の1～5月は平年より低い状態にあり、本年は前年に比べてかなり高めであった。
- ・オホーツク海では、1～4月旬まで流氷が接岸していたが、5月以降の海面水温は、北海道沿岸を中心に8月中旬まで平年よりも高めの状態が続き、その後は10～11月の一時期を除き、平年並みから低めで経過した。

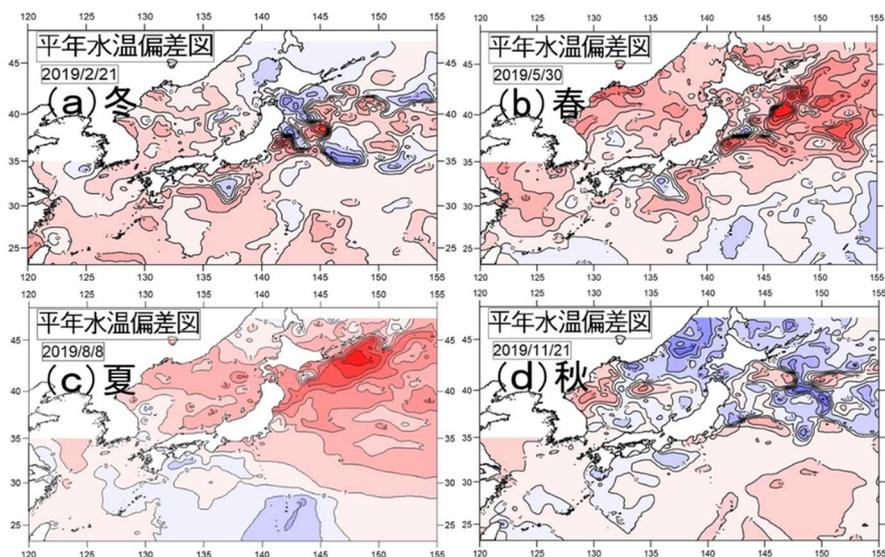


図1. 2019年の冬(a)、春(b)、夏(c)、秋(d)の代表的な水温分布の平年偏差図
(漁業情報サービスセンター)。

2. 漁況および市況

(1) マイワシ

1) 全般的状況(図2)

- ・本年の全国主要港における生鮮マイワシの水揚げ量は、11月末現在で47.6万トンであり、前年同期(40.3万トン)を約7万トン上回った。このうち太平洋側が47.3万トン(前年同期:37.2万トン)、東シナ海・日本海側が3千トン(前年同期:3.1万トン)で、東シナ海・日本海側の水揚げが著しく低調で推移した。
- ・月別の価格は、32～90円/kgの間で変動したが、11月末までの期間を通じた平均価格は41円/kgで、前年同期(42円/kg)並みであった。

- ・マイワシの資源状態については、太平洋側(太平洋系群)、東シナ海・日本海側(対馬暖流系群)ともに、中位水準で増加傾向にあると評価されている(平成 30 年度評価)。太平洋側における漁況と資源評価結果はよく対応しているが、東シナ海・日本海側については、本年に限れば両者には乖離がある。原因の一つとして、本年 1~4 月の日本海の海面水温が前年に比べてかなり高めであったことが考えられるが、資源を構成する各年齢群の大きさや、今後の各海域への来遊状況について注目していく必要がある。

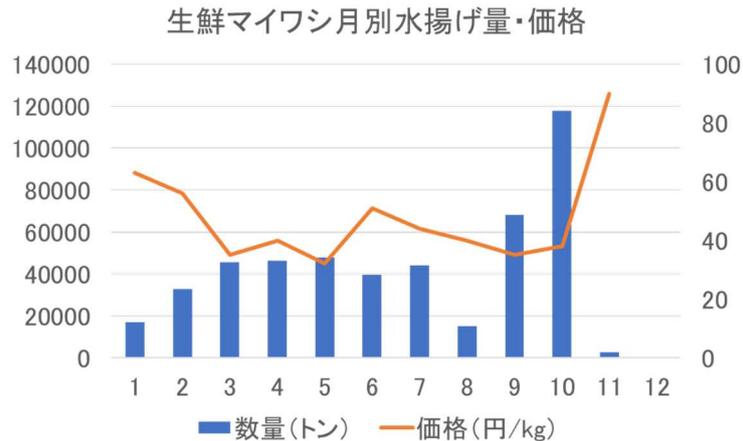


図 2. 2019 年の全国主要港における生鮮マイワシの月別水揚げ量と価格の変化。

2) 漁況経過

(太平洋側)

- ・三陸常磐海域では、本年は常磐～東北沿岸の水温が前年よりも低く、前年より漁場の北上が遅くなった。常磐海域では、7月26日まで漁場が持続し、前年よりも約15日遅くまで操業した。1～7月までの銚子、波崎、小名浜における水揚げ量は18.3万トンであり、前年(11万トン)を超えた。一方、沿岸発生群の房総～常磐海域への来遊が少なかったため、8月～10月における銚子港の水揚げ量は、前年より少なくなった。
- ・道東海域におけるまき網は、本年は6月25日より開始した。漁期全体では21.8万トンが漁獲され、1991年以来28年ぶりに20万トンを超えた。一方、まき網における1網当たりの漁獲量は、前年を下回る月が多かった。この背景として、前年よりも親潮が道東海域に広がり、魚群がまとまりにくかったことが考えられる。6月までは体長20cm以上の個体が主体であったが、7～8月は体長18～19cmが主体であり、8月以降は15～16cm台も出現した。全般的にマイワシの太り具合は悪かった(3. 特記すべき現象参照)。

(東シナ海・日本海側)

- ・本年の東シナ海・日本海のマイワシの漁況は極めて低調であった。主な水揚げ地である境港では、本年の水揚げ量は現時点で、前年の1割程度にとどまった。資源状態は中位水準で増加傾

向にあると評価されているが、漁場へ出現したマイワシは極めて少なかった。隠岐諸島周辺への冷水の南下が弱く、水温が高めで経過し、まき網漁場へマイワシが来遊しなかったことが考えられる。

(2) さば類

1) 全般的状況(図3)

- ・本年の全国主要港における生鮮さば類(マサバ+ゴマサバ)の水揚げ量は、11月末現在で32.2万トンであり、前年同期(41.9万トン)を9.7万トン下回った。このうち太平洋側が21.4万トン(前年同期:24.5万トン)、東シナ海・日本海側が10.5万トン(前年同期:17.5万トン)で、東シナ海・日本海側での水揚げ量の減少が顕著であった。
- ・さば類は、従来は冬季(1~3月)と秋季(10~12月)に水揚げ量が多いが、本年は太平洋中・南部、東シナ海、日本海西部において、水揚げが冬季に集中する傾向が見られた。
- ・月別の価格は、78~157円/kgで変動したが、11月末までの期間を通じた平均価格は106円/kgで、前年同期(90円/kg)を上回った。
- ・さば類の資源状態については、マサバが太平洋側(太平洋系群)で中位水準で増加傾向、東シナ海・日本海側(対馬暖流系群)で低位水準で増加傾向にあり、ゴマサバが太平洋側(太平洋系群)で中位水準で減少傾向、東シナ海・日本海側(東シナ海系群)で中位水準で横ばい傾向にあると評価されている(平成30年度評価)。ここ数年水揚げ量は増加傾向にあったが、本年は前年をかなり下回り、季節的なパターンにも変化が見られることから、今後の動向に注意が必要である。

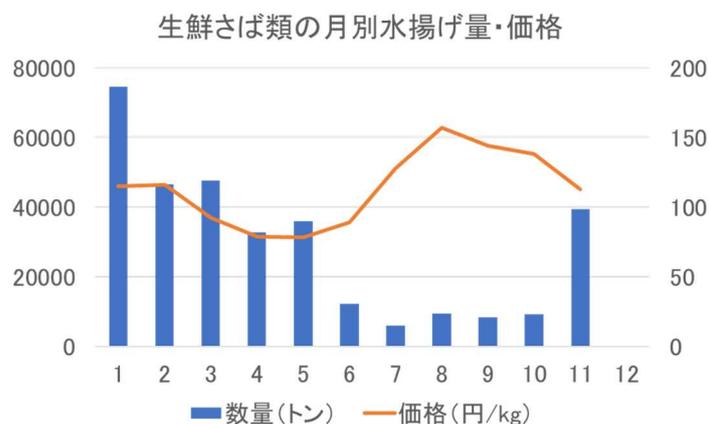


図3. 2019年の全国主要港における生鮮さば類(マサバ+ゴマサバ)の月別水揚げ量と価格の変化。

2) 漁況経過

(太平洋)

- ・冬~春に太平洋を南下した産卵群が、三重県沿岸から日向灘まで南下した影響で、三重県奈

屋浦では2～5月、宮崎県北浦では3～4月に前年を上回る水揚げ量となった。

- ・本年の北上期における三陸常磐のまき網では、さば類は散発的に漁場形成があったのみで、漁獲量は少なかった。この時期、魚群が沿岸から離れた沖合を北上したためと考えられる。
- ・道東海域では、10月下旬にまき網でわずかに漁獲された他は、散発的にマイワシに混じる程度であった。8月下旬～9月上旬に行われた釧路水産試験場の調査結果では、道東海域におけるマサバの分布量は前年を上回った。このことから、近年魚群の分布が沖合化していることに加え、親潮が道東海域に広がり、まき網の漁場域に魚群がまとまって分布しなかったことが考えられる。
- ・三陸・常磐海域のまき網では、前年と同様、例年よりも遅い11月22日から水揚げ量が増加した。10月下旬から襟裳岬南沖において、太平洋を北上する暖水と津軽暖水が繋がり、道東海域からの魚群の南下を妨げたこと、秋に気温が高く表層付近の水温低下が遅れたことが影響したと考えられる。なお、宮城県の定置網や底曳網では、5月から継続して漁獲があった。

(東シナ海・日本海)

- ・本年の東シナ海・日本海におけるさば類の漁況は低調であった。九州西沖では、前年は8～9月に魚群がまとまったが、本年は少なかった。例年この時期に、この海域で主体となる体長21～26cmの個体の出現が少なく、今後の動向に注意が必要である。
- ・対馬海域では、前年は10月から魚群がまとまったが、本年は12月に入っても魚群がまとまりにくい状況である。また、日本海西部の境港でも、本年2月以降、前年を下回る水揚げが続いている。水温が高く魚群の来遊が遅れているためか、本年生まれの小型魚の出現が少ないことによるものか現段階では判断がむずかしく、今後の動向に注目する必要がある。

(3) マアジ

1) 全般的状況(図4)

- ・本年の全国主要港における生鮮マアジの水揚げ量は、11月末現在で6.8万トンであり、前年同期(7.8万トン)を1万トン下回った。このうち太平洋側が6千トン(前年同期:7千トン)、東シナ海・日本海が6.2万トン(前年同期:7.1万トン)で、東シナ海・日本海西部が水揚げの中心であった。
- ・月別の価格は、170～300円/kgで変動しており、11月末までの期間を通じた平均価格は228円/kgで、前年同期(189円/kg)を20%上回った。
- ・マアジの資源状態については、太平洋側(太平洋系群)が低位水準で減少傾向、東シナ海・日本海側(対馬暖流系群)が中位水準で増加傾向にあると評価されている(平成30年度評価)。前年および本年と2年連続して水揚げ量が前年を下回っており、今後の動向に注意が必要である。

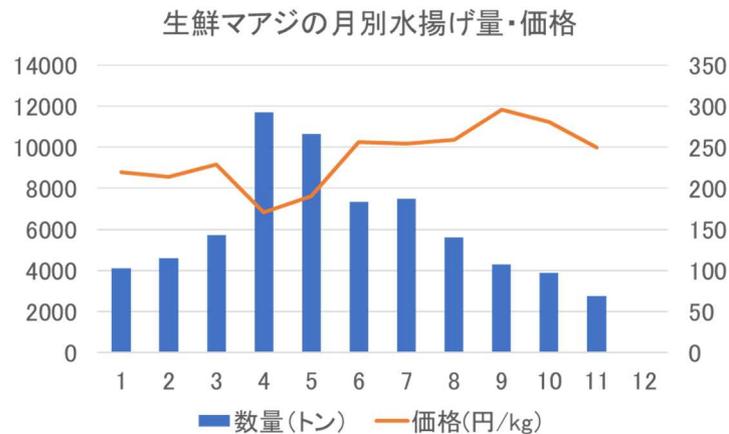


図 4. 2019 年の全国主要港における生鮮マアジの月別水揚げ量と価格の変化。

2) 漁況経過

(太平洋)

- ・大分県鶴見、宮崎県北浦における本年の水揚げ量は、5月～9月は前年を上ったが、10月以降は前年を下った。本年11月末現在の水揚げ量は、ほぼ前年並みとなった。
- ・三重県奈屋浦では、前年は5月と9月にまとまった水揚げがあったが、本年は両月ともに少なかった。本年11月末現在の水揚げ量は、前年の4割程度にとどまった。
- ・銚子では、前年は5～6月にまとまった水揚げがあったが、本年はこの時期の水揚げは少なかった。一方、7～9月には前年を上回る水揚げがあった。本年11月末現在の水揚げ量は前年を上回った。
- ・石巻では、近年は7～8月にまとまった水揚げがあるパターンを示している。本年は7月には前年を上回ったものの、8～9月は前年を下回った。本年11月末現在の水揚げ量は、前年を上回った。

(東シナ海・日本海)

- ・東シナ海・日本海においては、全般的に夏以降の水揚げ量は、前年を下回った。
- ・九州西沖では、前年8～9月に体長19～21cmの個体が多く好漁であった。本年は、7月は前年より水揚げ量が多かったものの、8～9月にはかなり少なくなった。本年は、夏場に体長19～21cmの個体の来遊がかなり少なかったためであり、今後の出現状況に注目する必要がある。
- ・対馬海域における水揚げ量は、4月は前年を上回ったものの、それ以降は前年を下回った。また、前年は11月から漁獲が上向いたが、本年は操業するまき網船が少ない影響もあり、前年よりもやや少なかった。
- ・日本海西部の境港では、1～4月の水揚げ量は前年を上回ったが、5月以降は前年を下回った。前年は10～11月に、21～23cmモードと17～18cmモードの魚群が来遊したが、本年は少

なかった。

- ・海域全体として、1 歳魚の出現が前年よりも少なかったことが水揚げ量の減少に影響を及ぼしており、今度の動向に注意が必要である。

(4) サンマ

1) 全般的状況(図 5)

- ・本年は、漁期ははじめから漁況は極めて低調に推移し、全国主要港における生鮮サンマの水揚げ量は 11 月末現在で 3.7 万トンである。12 月に入っても操業が続き、12 月 16 日夜の操業をもってほぼ終漁となった。最終的には 4 万トンを超えたが、5～7 月の公海域での操業(約 5 千トン)を加えても 5 万トンにはとどかず、1950(昭和 25)年に棒受網による操業が本格化して以来の最低値である 1969(昭和 44)年の 6.3 万トンを下回った。
- ・月別の価格は、8 月には 700 円/kg を超えたが、水揚げ量が上向いた 10～11 月には 200～300 円台に低下した。11 月末までの期間を通じた平均価格は 319 円/kg で、前年同期(188 円/kg)の 1.7 倍であった。
- ・北西太平洋におけるサンマの資源状態は 2010(平成)年以降減少傾向にあり、特に本年はわが国に近い水域の分布量が極めて少ないことが報告されていた。本年の漁況は、資源状況を反映したものであるといえるが、来年以降の動向を注視していく必要がある。



図 5. 2019 年の全国主要港における生鮮サンマの月別水揚げ量と価格の変化。
5～7 月の公海域における操業分は含まない。

2) 漁況経過

- ・本年は、8 月に小型船が例年主漁場となる花咲港東南東沖の親潮第一分枝で魚群探索を行ったが、従来のサンマの適水温帯においても魚群を発見できず、8 月下旬～9 月中旬の主漁場は、公海の東経 157～161 度付近と非常に通い場所となった。この漁場においても魚群が少なく、また漁場が遠いため小型船の多くは出漁できない状況が続いた。魚体は体重 100～120g が主体であり、前年よりも痩せていた。

- ・9月下旬には、体重110～130g主体で150gを超える太ったサンマも出現し、本格的な南下群が出現した。漁獲量も徐々に増加し、道東海域にも漁場が形成されるようになった。本年の水揚げのピークは10月下旬～11月上旬であり、例年よりも遅かった。11月中旬は時化が続き、沖合の漁場へ行くことができず、水揚げ量は減少した。11月下旬には襟裳岬東沖にも一時的に漁場が形成されたが、魚体は小さかった。12月に入ると、主漁場は常磐海域南部となり、漁獲量は徐々に減少した。

(5)カツオ・ビンナガ

1) 全般的状況(図6、7)

- ・本年の11月末現在の全国主要港における生鮮カツオ水揚げ量は、竿釣りが3.0万トン(前年同期:3.5万トン)、まき網が7.7千トン(前年同期:8千トン)、全体では3.8万トン(前年同期:4.3万トン)で、概ね前年同期並みかやや下回る水準であった。また、生鮮ビンナガ(竿釣り+まき網)の水揚げ量は1.6万トンで、前年同期(2.7万トン)の6割にとどまった。
- ・本年は、黒潮の大蛇行の影響等によりカツオやビンナガ魚群の北上が遅れたほか、東北海域では暖水域が沖合に形成されたため、漁場も沖合に形成されるなどの特徴があった。
- ・月別の価格は、カツオでは、竿釣りが、漁期前半の2～6月には概ね400円/kg前後、7～9月の盛漁期は200～230円/kgで経過した。期間を通じた平均価格は298円/kgで、前年同期(306円/kg)をやや下回った。まき網は、盛漁期の7～9月は290～390円/kgで経過し、漁期を通じた平均価格は310円/kgで、前年同期の264円/kgを17%上回った。
- ・ビンナガでは、漁期前半の概ね400円/kg台で経過したが、水揚げ量が減った8月以降は600円/kg前後となった。期間を通じた平均価格は476円/kgで、前年同期(415円/kg)を15%上回った。
- ・カツオおよびビンナガの資源状態については、太平洋熱帯水域における他国の漁獲量も含めて国際機関により評価されている。カツオは、従来高位水準であると評価されていたが、本年評価が更新され、近年漁獲圧が増加し親魚資源量も減少していることが指摘された。ビンナガについては、現時点で中位水準にあると評価されている。両種ともに、近年はわが国周辺水域における漁況の変化が大きくなっており、海況状況を含め、今後の動向に注目する必要がある。

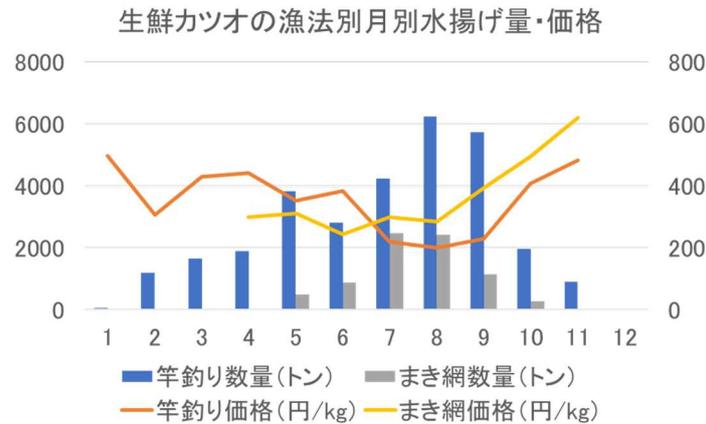


図 6. 2019 年の全国主要港における竿釣りとまき網による生鮮カツオの月別水揚げ量と価格の変化。

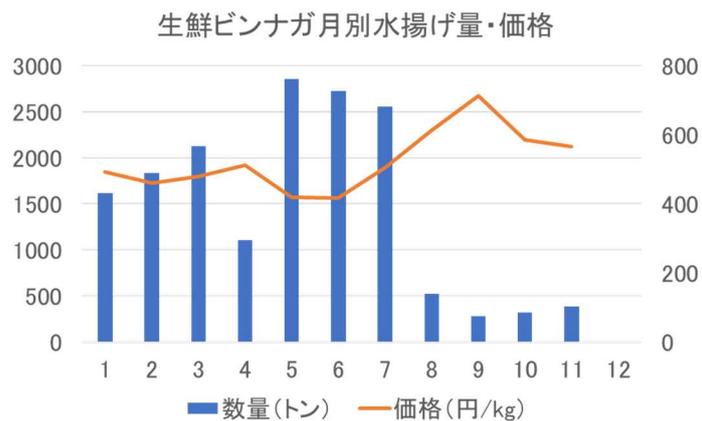


図 7. 2019 年の全国主要港における生鮮ビンナガの月別水揚げ量と価格の変化。

2) 漁況経過

- ・3月下旬～7月上旬に、黒潮大蛇行の内側の熊野灘およびその周辺の暖水域で、釣りによるカツオおよびビンナガ漁場が持続した。この場所で漁場が持続するのは、近年なかった現象である(3. 特記すべき現象参照)。
- ・三陸海域でのカツオの漁場形成は、前年よりも2ヶ月ほど遅れ、漁獲が本格化したのは7月下旬となった。気仙沼への初水揚げは、まき網は例年通りの5月中旬であったが、その後6月には水揚げがなく、本格的な水揚げは7月以降となった。また、カツオ、ビンナガともに漁場は前年よりも東側に広がり、はえ縄によるビンナガの漁獲量の伸び悩みにつながった。
- ・本年は、黒潮大蛇行の内側で、比較的長期間にわたり竿釣り漁場が形成されたこと、黒潮続流が北上することなく東方に流れ、加えて前年よりも沖合において水温が高かったことが、カツオやビンナガ魚群の北上の遅れや漁場の沖合化をもたらしたと考えられる。

- ・三陸海域でのカツオの漁場形成は、近年は10月頃で終漁していたが、本年は11月下旬まで続き、気仙沼は水揚げ量23年連続日本一となった。戻りカツオとして身質がよく、後半は比較的価格も高くなった。竿釣りの餌となるカタクチイワシが、少ないながら供給されていたことも、漁期が延びた一因となった。
- ・前年7月には、アニサキスの寄生による影響で、気仙沼におけるカツオの平均価格は170円/kgを下回った。その後量販店やスーパーで刺身カツオの販売をとりやめた所が多く、冷凍やたたき需要主体となったため、本年9月まで平均価格は200円/kg台と安値であった。

(6)スルメイカ

1) 全般的状況(図8)

- ・本年の全国主要港における11月末現在のスルメイカの水揚げ量は、生鮮が2.4万トン、冷凍が2.9千トンであった。生鮮は前年同期(2.3万トン)を並みであったが、冷凍では前年同期(1.1万トン)の25%にとどまった。生鮮と冷凍を合わせた全体は2.6万トンで、前年同期(3.4万トン)の8割弱であった。
- ・地域的にみると、生鮮では、5~7月にかけて日本海西部で比較的好調であったほか、10月末から11月にかけて羅臼で集中した水揚げ(2.5千トン)がみられた。冷凍では、沖合域での漁況の不調を反映して、太平洋側の主要な水揚げ地である函館、八戸での水揚げ量が前年同期の1割前後、日本海側の酒田や小木の水揚げ量も前年同期の6割程度にとどまった。
- ・月別の価格は、生鮮では520~830円/kgで経過し、期間を通じた平均価格は636円/kgで、前年同期の535円/kgより2割ほど高めであった。冷凍は480~1000円/kgで経過し、期間全体の平均価格は849円/kgで、前年同期の599円/kgの1.4倍であった。
- ・スルメイカの資源状態については、主に太平洋側を北上し日本海を南下する冬生れ群は、低位水準で減少傾向、主に日本海側を北上南下する秋生れ群は、中位水準で減少傾向にあると評価されている(平成30年度評価)。近年は急激に水揚げ量の減少が進んでおり、今後の動向を注視する必要がある。

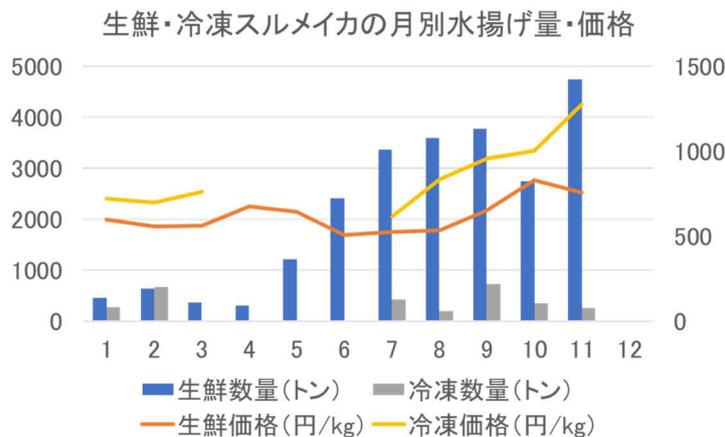


図8. 2019年の全国主要港における生鮮および冷凍スルメイカの

月別水揚げ量と価格の変化。

2) 漁況経過

(日本海)

- ・金沢では、本年は例年通り5月中旬から水揚げ量が増加したが、近年水揚げ量が減少する7月になっても増加が続いた。本年の水揚げ量のピークは7月中旬で、前年よりも1ヶ月以上遅かった。
- ・新潟では、本年は例年水揚げ量が増加する5月～6月になっても水揚げ量が増加せず、増加したのは7月中旬になってからであった。冬から春先にかけて、新潟以北の日本海沿岸の水温が低めで経過したため、日本海沿岸におけるスルメイカの北上時期が遅くなったと考えられる。
- ・松前さくらおよび小樽では、本年6月下旬～7月上旬に水揚げ量が増加したが、7月中旬以降、水揚げ量は減少した。このことから、沖合を北上したスルメイカの沿岸への差し込み時期はほぼ前年並みであったものの、その量は少なかったと考えられる。

(太平洋・オホーツク海)

- ・三陸～常磐海域では、本年7月下旬～8月下旬は、前年を上回る水揚げ量であった。これは、この時期に沖合から沿岸へ暖水が波及し、沖合から断続的に魚群が来遊したことによると考えられる。
- ・津軽海峡～道南太平洋では、本年は、例年水揚げ量が増加する8～9月になっても水揚げ量は前年を下回った。日本海からの魚群の来遊が少なく、また太平洋沿岸は親潮が発達して沖合から暖水が波及しにくい状況であったことによると考えられる。一方、11月中旬には水揚げ量が増加し、この時期になって道東海域から魚群が南下してきたとみられるが、南下群の出現時期は、前年よりも10日ほど遅かった。
- ・道東太平洋では、本年は7月下旬から漁場が形成され、8月下旬と10月下旬に水揚げがピークとなった。花咲港への水揚げ量が多く、釧路港では水揚げが少なかった。根室海峡～オホーツク海域では、前年を上回る水揚げ量となった。太平洋を北上した暖水が納沙布岬から北方四島周辺に差し込み、太平洋を北上した魚群(冬生れ群)が来遊したことによると考えられる。

(7) その他の魚種

1) カタクチイワシ

- ・11月末現在の水揚げ量は2.2万トンで、前年同期(1.2万トン)の1.8倍に達した。太平洋側での水揚げ量が前年をやや下まわる一方、東シナ海や日本海西部での水揚げ量が大きく伸びており、この海域におけるマイワシの減少を補う形となった。
- ・この背景の一つとして、1～5月に日本海の海面水温が高めであったことが、マイワシよりも暖水性である本種の漁場形成に効果的に作用したことが考えられる。
- ・月別の価格は42～85円/kgの範囲で変動したが、11月末までの平均価格は59円/kgで、

前年同期の 51 円/kg を上回った。

2) ウルメイワシ:

- ・11 月末現在の水揚げ量は 3.7 万トンで、前年同期(2.6 万トン)の 1.4 倍であった。このうち 1.5 万トンが、3~6 月と、9、10 月を中心に日本海西部の境港に水揚げされており、この海域におけるマイワシの減少を補う形となった。
- ・この背景の一つとして、1~5 月に日本海の海面水温が高めであったことが、マイワシよりも暖水性である本種の漁場形成に効果的に作用したことが考えられる。
- ・月別の価格は、63~87 円/kg で推移しており、11 月末までの平均価格は 75 円/kg で、前年同期の 60 円/kg に比べてかなり高めであった。

3) ブリ

- ・11 月末現在の水揚げ量は 4.4 万トンで、ほぼ前年同期(4.5 万トン)並みであった。冬季(1~3 月)の水揚げ量は 1.0 万トンで前年同期の 57%にとどまる一方、夏季(7~9 月)の水揚げ量は 1.4 万トンで前年同期の 146%に達した。
- ・月別の価格は、冬季には水揚げ量が少なかったため 260~520 円/kg で前年同期(170~330 円/kg)を上回った。夏季には 170~230 円/kg で前年同期(210~240 円/kg)よりも低めであった。11 月末までの平均価格は 244 円/kg で前年同期(230 円/kg)よりやや高めであった。

4) サケ(アキサケ)

- ・11 月末現在の水揚げ量は 4.6 万トンで、前年同期(6.7 万トン)の 69%であった。北海道における水揚げ量は前年同期の 76%(4.5 万トン)を維持したが、本州では前年同期の 20%(1.6 千トン)にとどまった。
- ・盛漁期である 9~10 月の月別価格は 450~600 円/kg、11 月末までの平均価格は 542 円/kg で、前年同期の 83%にとどまった。

5) アカイカ

- ・11 月末現在の太平洋公海域で漁獲された冷凍アカイカの水揚げ量は 7.1 千トンで、前年同期(4.6 千トン)の 1.5 倍であった。これは、主にスルメイカの不漁にともなう操業隻数の増加によるものである。
- ・月別の価格は 7 月には 500 円/kg であったが 9 月には 400 円/kg となり、11 月末までの平均価格は 455 円/kg で、前年同期(481 円/kg)をやや下回った。
- ・なお、わが国周辺(道東~三陸沖)におけるアカイカ資源は極めて低水準の状況が続いており、生鮮アカイカの水揚げ量は前年に引き続き極めて僅かであった。

3. 特記すべき現象

(1) 道東海域におけるマイワシの痩せ(図 9)

本年 8 月下旬に、道東海域のたもすくい漁で漁獲されたマイワシの体長－体重関係を前年同期と比較すると、20～40g 痩せている傾向があり、特に体長 19cm 以上(2 歳魚と考えられる)で顕著であった。この痩せ具合は、密度効果により成長が遅れていたとされる 1980 年代の資源高水準期と比較しても同程度であった。現在、太平洋側のマイワシ資源は増加しつつあるとはいえ、その水準は 1980 年代と比べるとまだ低い。したがって、この体長－体重関係の変化の背景としては、餌料環境などの環境変化が考えられるが、具体的にどのような変化があったかについては現時点では明らかでない。このような変化は、マイワシの利用の仕方や再生産関係にも影響を及ぼすものであり、他の魚種の状況を含め今後の変化を注視していく必要がある。

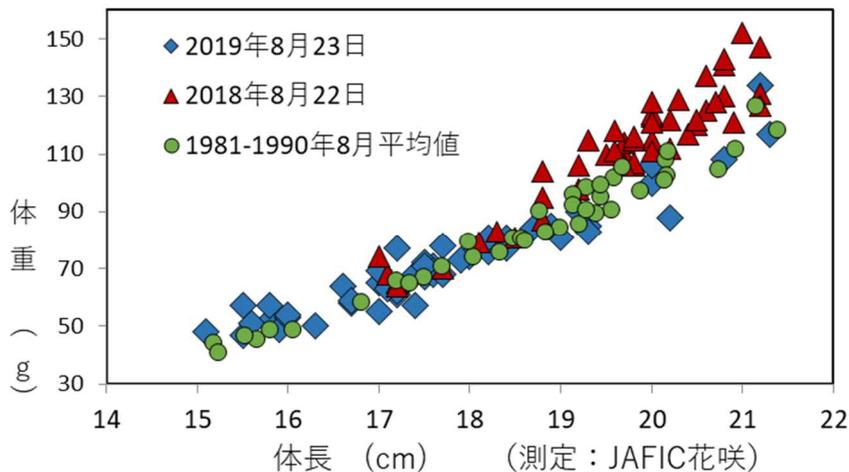


図 9. 道東海域における 2018、2019 年と 1980 年代の資源高水準期のマイワシの体長－体重関係の比較。2018 年と 2019 年は 8 月下旬のたもすくい漁獲物、1980 年代の高水準期は、1981 年～1990 年 8 月のまき網によるマイワシ漁獲物の平均値(北海道区水産研究所・釧路水産試験場測定)。

(2) 黒潮大蛇行の内側におけるカツオ・ビンナガ漁場の形成(図 10)

黒潮の大蛇行時には、熊野灘～遠州灘にかけて暖水の波及が及ぶことが多い。本年も冬季から熊野灘～遠州灘にかけて暖水域が連続的に形成された。特に 6 月中旬には、蛇行後の黒潮が遠州灘に著しく接岸して流れ、大蛇行の内側の海面水温がかなり高め(22℃以上)となった。このため、4～7 月にかけて熊野灘や遠州灘(特に熊野灘)でカツオやビンナガの竿釣り漁場が継続して形成され、東北海域への魚群の北上の遅れの背景の一つとなったと考えられる。

過去の大蛇行発生時にも、暖水の波及により熊野灘～遠州灘の海面水温が 19℃以上の場合には、熊野灘を中心にカツオ・ビンナガの竿釣り漁場が形成されていた。現在の黒潮大蛇行は、今後しばらくは継続すると見込まれており、大蛇行の消長とあわせ、来漁期のカツオ・ビンナガ漁況を予測する上で、有効な手がかりとなると考えられる。

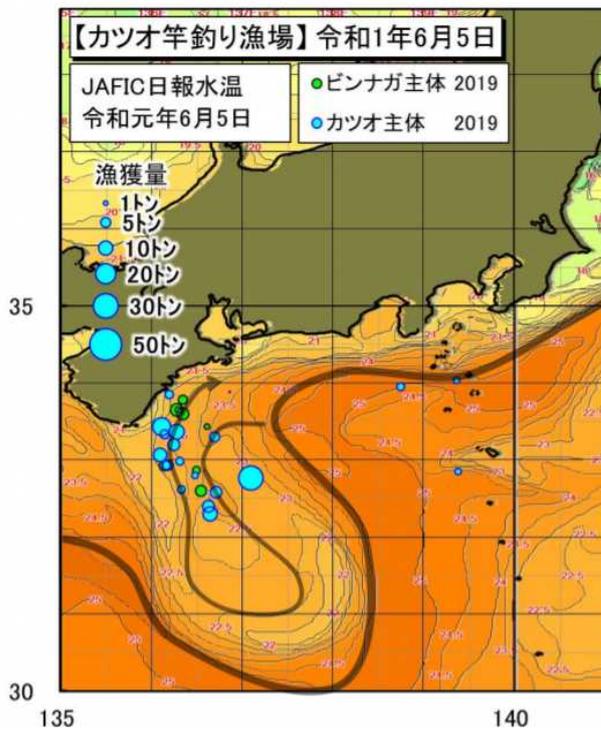


図 10. 2019 年 6 月のカツオ、ビンナガの竿釣り漁場(漁業情報サービスセンター)。

漁獲水温:

カツオ:22.1~25.0°C、平均 22.8°C。

ビンナガ:22.2~23.9°C、平均 22.8°C。